

【 論文 】

健常幼児と障害幼児の 語彙及び音韻意識獲得の特徴

大 島 光 代

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻

要約

健常幼児と障害幼児の語彙及び音韻意識獲得状況の差異を確認し特徴を明らかにするため、A県B市の健常幼児（5歳児）と障害幼児（5歳児）に対して、語彙及び音韻意識の獲得状況を調査した。正答率が高かったのは、「清音」「濁音・半濁音」「拗音」「撥音」「促音」「拗長音」の順であった。カテゴリー別にみると「③動物」「④昆虫・虫」「⑤食べ物」「⑥乗り物」「①生活にかかわることば」「⑦身体」「②植物」の順であった。障害幼児は5名であるが、健常幼児と比較すると、全員が獲得語彙及び音韻意識の状況には遅れが見られた。正答率に有意な差が認められたことばは、20語で、特殊音節のうち特に撥音が含まれることばが多かった。健常幼児群の中には、語彙としてことばを獲得できているにもかかわらず、文字がほとんど読めないために音韻分解課題がクリアできない幼児の存在や、語彙力は高いにもかかわらず音韻分解課題が困難な幼児の存在が明らかになった。幼小接続期の早期指導・支援の可能性を拡大するため、就学後に子どもの困難が自覚され問題となる学習障害の中でも「限局性学習症（発達性読み書き障害）」（specific learning disorder）の予兆と言えるような実態を検証する必要がある。

キーワード

語彙獲得 音韻意識獲得 言語調査 健常幼児 障害幼児

1. 研究の背景

1. 1 言語指導プログラム開発への取組

著者は、2004年文部科学省の科学研究費により、聴覚障害児向けの音韻意識獲得と語彙の拡充を目指した言語指導プログラムを開発した（大島, 2004）。さらに4年後、同様に科学研究費により、聴覚障害児向けの構文力の向上を目指した言語指導プログラムを開発した（大島, 2008）。聴覚障害児の教育現場で活用することによって、言語指導プログラムの有効性を確認した。2014年度から、これらのプログラムを用いて、聞こえる幼児児童向けの音韻意識獲得から語彙の拡充、文の理解までを取り扱った言語指導プログラムの開発を開始した。

自閉症スペクトラム障害の幼児には、言語の表出が難しいタイプが見られる。その場合、児童期に絵カード交換システムのようなコミュニケーションツールが用いられることが多い。音韻意識の獲得に注目し、早期からの言語指導を行うプログラムはいまだ確立されていない（大島, 2015）。遊びを通して視覚的な補助教材と音韻を結び付ける教具は、聴覚障害児のみならず、様々な障害児にも音韻意識を獲得する上で有効であると考えた。

プログラムでは、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」の音韻に対応したことばである184語を用いる。日本語を構成する音韻全てに対して、その音韻で始

まることばを準備するにあたり、その65%は小学校の国語の教科書（光村図書^{注1)}）で使用されることばから選択した。残りの35%は幼児教育施設（保育園・幼稚園等）で身近に接するものや食べ物、植物、動物や身体の様子などのことばと、少し難解なことばも含めた。2015年度は、本研究にて、これらの語彙の健常幼児及び障害を併せ有する幼児（以下障害幼児とする）の正答率（通過率）調査を行い、その結果を考察し、言語指導プログラムの最終版開発につなげる取組を行った。

1. 2 文部科学省の指針からみる幼小接続期の課題

文部科学省は、平成30年度の幼稚園教育要領の改訂に向け、新たな方針を提示している。教育課程企画特別部会論点整理（案）（文部科学省, 2015）では「幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期である」とし、「幼児期において、探究心や思考力、表現力等に加えて、感情や行動のコントロール、粘り強さ等のいわゆる非認知的能力を育むこと」を重視し、「幼児一人一人に応じた対応を行うことや、日々の活動が小学校以降の生活や学習の基盤につながっていることを幼稚園の教員が再認識し、意図的に取り組むこと」を求めている。「そうした幼児教育の改善・充実を図る中で、小学校教育との接続を一層強化していくことが重要である」とし、さら

なる幼小の円滑な接続を提言している。幼小接続期における課題は多岐にわたる。発達障害児の場合、行動面での課題のほかに、学習面での課題をかかえる場合が多い。しかし、学習障害は、ほぼ就学後に確認されている。

1. 3 学習障害等の早期発見・早期支援の現状

小林 (2016) は、言語学習の基礎を早期に養う重要性について「これまでの研究で、ことばの遅れは読み書きの遅れに直結しており、ことばの発達はその後の認知能力を予測する大きな要因であることがわかっている」とし、「早期にこれらの子どもの言語学習困難を見つけることは不可能ではない」とした。さらに、「早期に発見され、適した指導を受けてきている学習障害、境界知能をもつ子どももかなり少ない」と述べている。

幼小接続期の早期指導・支援の可能性を拡大するため、就学後に子どもの困難が自覚され問題となる学習障害の中でも、「限局性学習症 (発達性読み書き障害)」(specific learning disorder) の予兆と言えるような実態を検証する必要がある。

1. 4 音韻意識とは

子どもが正しく読み書きができるようになるためには、文字表記と音韻の対応規則を理解しなければならないことに加え、連続的に表現される話しことばを音節や音素単位で文節的にとらえ、その音韻的側面を分析できる能力が必要となる (長南・斉藤, 2007)。「音韻」とは、概ね「音素」ととらえることができる。「音素」とは、我妻 (2011) によれば「話しことばの時間的な単位として、文章、文、単語、音節 (かな文字に相当) とあるが、音素は音節よりもさらに小さな単位である。音素は子音 (しん) と母音 (ぼいん) に分けられる。例えば [サ] という音節は「スー」という子音 /s/ と [ア] という母音 /a/ が子音母音の順に連続して出されている音声である。/s/ 音と /a/ 音は構音方法が違うので同時に発音することはできない」とする。

天野 (1986) は、「音韻意識の発達がかな文字の習得の必要条件である」とし、大石 (1997) は、発達性読み書き障害について、「音韻意識の発達の遅れが障害の基盤の一つである」と示唆した。

音韻意識は、語を構成する音韻系列を分析することによって、その順序の構成、音韻的組成を知る行為や技能のことである (天野, 1988)。原 (2003) は、音韻意識とは「語音の知覚は音と意味を対応づけ、語の認知、語彙の獲得に重要な役割を果たすが、話しことばでの言語経験の蓄積と全体発達の中で、語の意味と切り離された音韻の側面に関する意識を向け、処理することができる能力が発達することが明らかにされてきた。こうした音韻面に関する意識を音韻意識 (phonological awareness)

という」とした。

天野 (1970) は、健常幼児を対象として、音韻意識の獲得状況を測るものの中では、最も早く可能となるといわれる音韻分解課題を実施した結果、日本語の基本的音節を音節分解できる年齢は概ね 4 歳半であることを示した。大石ら (1999) は、音韻意識の発達は、4, 5 歳までの言語発達を土台として達成されることが示唆され、音声言語および文字言語の発達上重要なテーマであるとした。

聴覚障害幼児は、聴覚を十分に活用できないことから、自主的な音韻意識の成長には限界があり、音韻意識の獲得を目指した指導法が様々に実践されている。著者の開発した言語指導プログラムは、PC を用いることにより、誰が実施しても学習の再現性があり、聴覚障害児がゲーム感覚で遊びながら音韻意識の獲得が達成できるものである (大島, 2004, 2008)。

今回のプログラムでは、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」「文の理解」の 7 つのコースを設けた (大島, 2014)。各コースで取り上げた音韻は、184 音となる。たとえば「清音」コースの [ア] /a/ であれば、「あひる」の音韻数を先に図 (☆) で 3 個提示し、絵の名称を選択肢のひらがなから選び、図 (☆) に当てはめて「あひる」と回答する。「拗音」コースの [ピャ] /pia/ 等は、適当な日本語がない。このような音韻については、音声と文字の対応を動画で確認するが、ゲームの素材としては取り扱わないようにした。それ以外の音韻は、「生活にかかわることば」「植物」「動物」「昆虫」「食べ物」「乗り物」のカテゴリー別に、2 音韻、3 音韻、4 音韻、5 音韻、6 音韻のことば (主に名詞) として提示した。

1. 5 研究の必要性

2013 年に文部科学省がほぼ 10 年ぶりに実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」から、柘植 (2016) は、おおよそ 6~7% の割合での、知的障害のない発達障害の可能性を示した。調査結果の「1 年生: 7.3%」という割合は、幼小接続期における「小 1 ギャップ」の影響が予測できる。その数値を用いて、2016 年 9 月に総務省統計局が発表した日本の人口 (総務省統計局, 2016) の 0~4 歳の乳幼児の総数 515 万人に当てはめると最大で約 37 万人の LD サスペクト (学習障害予備軍) が幼児教育現場に存在する可能性が浮かび上がる。

言語の課題をベースとする LD サスペクトを早期に見出し、適切な指導・支援を行うことは「障害予防」の視点からも重要である。さらに療育現場のみならず、保育現場で言語にかかわる合理的配慮を実践することが、幼小接続期において就学後の低学力を予防することにつながる。

日高ら(2007)は、健常幼児と発達障害児の音韻意識の発達過程と文字獲得の関連性について調査を行い、「健常幼児の音韻発達を基準とすると、発達障害児は健常幼児よりも読み書きと音韻操作のバランスが悪く、読み書きを獲得していても、音韻を十分操作できない」とした。さらに「発達障害児の音韻意識の自生的な成長には限界があり、音韻処理能力は健常幼児よりも低いことが示唆された」としたことから、誰が実施しても学習の再現性があるPCを用いた言語指導プログラムの開発に、発達障害児の自主的な音韻意識の成長を支援する可能性が見出せる。また、幼児教育施設で音韻意識・語彙の獲得調査を実施し、その結果を基に、言語指導プログラムを活用してその両方の獲得をすすめる実践は文部科学省も注目する幼小接続期の「アプローチカリキュラム」としても期待できる。幼児期における軽度の知的障害児や限局性学習障害(発達性読み書き障害)を含む発達障害児の音韻意識の獲得を促進する具体的な支援の方法は、いまだ確立されていない。調査と療育の両方を実践できる幼児向けの言語指導プログラムの開発が期待される。

幼児期に学習障害児、特に「限局性学習症(発達性読み書き障害)」の可能性が高い幼児をみつけ、早期支援を実施することによって、早期改善や症状の軽減が実現する可能性は高い。そのため言語指導プログラム開発と同時に、幼児期における発達性読み書き障害の兆候を見出す調査は、大きな意義をもつ。

2. 研究の目的

発達障害は、幼児期において「自閉症スペクトラム障害」のように「目が合わない」「こだわりが強い」「人間関係が構築しにくい」など、誰の目から見ても援助が必要なことが見てとれる障害の場合、療育に結びつく可能性は高い。しかし、極端にことばが少ない場合を除き、ことばにおける音韻処理の課題は見えにくい。本研究においては、幼児に対し、日本語の音韻1つ1つに対して、音韻分解課題を行うことによって、音韻意識が十分に獲得できていない幼児を特定することができる。

著者は聴覚障害幼児を対象とする言語指導プログラムを開発し活用することで、音韻意識の獲得及び語彙の拡充、構文の力の向上を実現した。本研究では、聴こえる障害幼児を対象とする言語指導プログラムの開発を目指し、健常幼児及び障害幼児の語彙及び音韻意識獲得の特徴について調査する。調査では、絵カードを提示し、表示されているものの名前や様子などをことばで表出し、ことばを構成する音韻を分解できれば正答と判断する。健常幼児の音韻意識や語彙の獲得状況を把握すると同時に、健常幼児と障害幼児の言語処理過程の一端を明らかにする。また、幼児向けの言語調査(絵カード使用)では難解な語彙を確認することで、プログラム開発(最終

的な改善・改良)に役立irる。

A県B市のこども園(C園・D園)の健常幼児の語彙獲得の状況及び音韻意識の獲得状況とこども発達センターに通う発達障害幼児の状況を言語調査により比較し、差異を確認することにした。また、言語指導プログラムで取り扱った語彙のうち、幼児には獲得しやすい語彙と時間を要する語彙の特徴について明らかにする。

就学後に判明するLD児(学習障害児)は、LDサスペクト(学習障害予備軍)として、幼児教育施設に存在する。この潜在的な幼児について、この調査結果により予兆が確認できる可能性を考察する。さらに、様々な障害幼児の音韻意識の獲得・語彙の拡充・読み理解・構文の力の向上を目指す言語プログラムを開発し、幼児期からの支援への取組の可能性を考察する。

3. 研究の方法

3. 1 調査の目標

以下のような言語調査を実施し、健常幼児群と障害幼児群の正答率を比較する。

- ① A県B市のC園・D園の年長児(5歳児)の語彙獲得及び音韻意識の獲得状況を知る。
- ② 清音、濁音・半濁音、撥音、促音、拗音、拗長音の含まれたことばの音韻分解課題の結果により、音韻意識の獲得における音韻処理過程の傾向を知る。
- ③ 障害幼児と健常幼児の結果を比較し、音韻処理能力は健常幼児よりも低い傾向があることを確認する。
- ④ 言語調査の絵カードで取り扱うことばとして、幼児には難しいことばを確認する。

3. 2 調査の対象と期間

A県B市立のC園・D園に通う年長児65名及びC園に在籍し「気になる子ども」として、Fこども発達センターへの療育につなげた年長の障害幼児2名及びEこども発達センターに通う年長の障害幼児3名(脳性麻痺1名・自閉症2名)を対象とした。ただし健常幼児の65名には、グレーゾーンの幼児も含まれるが、今回の調査ではこども発達センターでの療育を受けている幼児を障害幼児とした(表1)。

表1 幼児の内訳(n=70)

所 属	人数(人)	平均 CA
C・D 園の健常幼児	65	6.8
C 園の障害幼児 ※	2	6.7
E こども発達センター通所	3	6.7
計	70	全体平均 6.8

※ Fこども発達センター通所

調査期間は、C園・D園では平成27年5月から11月、Eこども発達センターでは、9月から12月に実施した。

3.3 調査の方法

調査は以下の手順で実施した。(1人1回15分程度)

- ① 個別に調査を行う。1回15分程度を目安に全6コース(「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「拗音」「拗長音」)のことはばを調査する。(全所要時間:1人90分程度)
- ② 「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」のコースごとに、順番に絵カードを提示し、ことばで説明を加えた後、絵で表されたものの「ことば」(名称・様子など)を聞く。
- ③ 「ことば」の音韻数を提示し、語音を分解し、語頭音、語中音、語尾音に対する音韻を選択肢のひらがなから当てはめるよう促す。
- ④ 平仮名が読めない子どもには、口頭で音韻を当てはめるよう促す

3.4 調査用教具(絵カード)

調査時には、A4サイズの図1のような絵カードを提示し、絵の名前や絵で表される様子をことばで表現するよう促した。

絵カードを用いて、調査を実施する初回は、「練習」として選択肢にあるひらがなの上に同じ大きさの文字カードを載せ、文字が☆の位置に動くようにして提示した。

調査の際には、子どもへの絵カードの説明の文を同様に提示することで、調査条件を一定にした。ほとんどの場合、「①生活にかかわることば」「②植物」「③動物」「④昆虫・虫」「⑤食べ物」「⑥乗り物」「⑦身体」のカテゴリーの名称を用いながら、「この〇〇は、なんですか」と質問する。これをタイプAとした。幼児には難しいと思われることば(絵)は説明を加え、これをタイプBとした。タイプBの説明とことばのカテゴリー(①生活にかかわることば、②植物、③動物、④昆虫、⑤食べ物、⑥乗り物、⑦身体)を表2に示した。

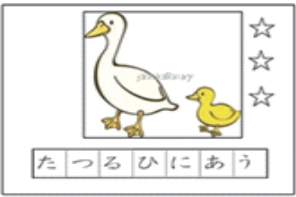


図1 調査に使用した絵カード

表2 絵カードの説明(タイプB)

分類	音韻	ことば・カテゴリー	説明文
清音	け	けむし ④	桜の木にすることがあります。身体にはいっぱい毛がある虫です。
	さ	さつまいも ②	みんなで畑に植えて、みんなで掘ります。
	す	すすき ②	お月見をするときに、御団子と一緒にかざる草です。
	た	たからもの ①	海賊が大好きで集めています。
	ち	ちりとり ①	お掃除をするときに、つかいます。
	つ	つめきり ①	パチンパチンとする道具です(つめを切る動作をする)。
	な	なのはな ②	春の花です。畑にさいています。
	に	にわとり ③	「コケコッコー」と鳴く鳥です。
	ぬ	ぬの ①	お母さんが、これをつかって袋を縫ったりします。
	の	のりまき ⑤	おすしの仲間です。
	は	はちみつ ⑤	くまのプーさんが大好きなものです。
	ひ	ひなまつり ①	3月3日に女の子のためにするものです。
	ふ	ふみきり ①	電車が通るとき、カンカンカンと鳴って知らせます。
	へ	へそ ⑦	みんなのおなかにあります。
	ほ	ほうれんそう ⑤	野菜です。根っこのところが赤いです。
	ま	まくら ①	寝るときに使うものです。
	む	むささび ③	木から木に飛ぶことができる動物です。
	も	もなか ⑤	中にあんこが入っているおかしです。アイスにもあります。
	や	やどかり ④	海の砂浜にいます。貝のおうちを背中に背負っています。
	ゆ	ゆきだるま ①	雪が降ったとき、子ども園の庭で作ったことがあると思います。
濁音・半濁音	よ	よる ①	暗くなって、空にはお星さまやお月様が出ます。
	る	るりたては ④	青い色の蝶々です。少し難しい名前は何でしょうか。
	が	がいこつ ⑦	人の骨です。
	ぎ	ぎんめだる ①	オリンピックで2番の人がもらえます。
	げ	げた ①	「ゲゲゲの鬼太郎」がはいています。カランコロンと音がします。
	じ	じめん ①	こっちは、空です。ここは何ですか。
	ぜ	ぜんざい ⑤	あまくて美味しいです。あずきとおもちが入っています。
	だ	だんぶかあ ⑥	土などを運ぶ働く車です。
撥音	び	びえろ ①	サーカスで、おもしろいことをする人です。
	あ	あんぱん ⑤	パンの中に甘い茶色のもが入っています。
	う	うんち ①	おしりから出てきます。トイレで出します。
	え	えんそく ①	この人が先生です。みんなリュックサックにお弁当を入れてバスで出かけます。
	お	おんなのこ ①	スカートをはいています。
	か	かんづめ ⑤	ここに指を入れてパカンと開けます。中には食べる物が入っています。
	き	きんかん ⑤	みかんより小さい果物です。木にたくさんなります。
	く	くんたま ⑤	おじさんが大好き。ラーメンにも入っているたまごの名前は何ですか。
	け	けんか ①	この二人が、怒りながら「やめて」「だめ」と言っています。何をしていますの。
	こ	こんにちは ①	この子は、頭をぺこりとさげてあいさつしました。何と言っていますか。
	さ	さんぽ ①	お外を犬と一緒に歩いています。何をしていますか。
	す	すんなり ①	やどかりが、貝からスーと出てきました。スーと同じようにつかうことばは何。

撥音	せ	せんすいかん ⑥	海の中にもぐります。この乗り物の名前は何かですか。
	そ	そんごくう ①	お話に出てくる強い狼です。きんとん雲に乗って如意棒を持っています。
	つ	つんつん ①	この女の子は、ぶどうをつつきました。どんなふうにつちていますか。
	な	なんてん ②	お正月にかざる赤い実のつく草です。
	ぬ	ぬんちゃく ①	忍者が戦うときに使います。
	ね	ねんど ①	こども園のお部屋のロッカーに入れてあります。何でも作れます。
	の	のんびり ①	この二人は、どんなふうに通っていますか。
	ひ	ひんと ①	この子は、なぜなぜが難しいので、〇〇〇を出してと頼んでいます。
	ふ	ふんか ①	お山がぼかんと爆発することを何と言いますか。
	へ	へんじ ①	この子は名前を呼ばれたので「はい」と言いました。これを何と言いますか。
	べ	べんとう ①	遠足に持っていくものです。
	ま	まんが ①	絵がかいてあります。読むとおもしろいです。
	み	みんみんぜみ ④	夏に木にとまってよく鳴くせみの名前は何かですか。
	む	むんむん ①	暑くて暑くて、この子は「〇〇〇〇する」と言っています。
	め	おめん ①	顔につけるものです。
促音	も	ももんが ③	木から木に飛べる動物です。
	や	やんわり ①	「だめ」ではなく、やさしく「だめなんだよね」と断りました。どう断ったかな。
	ら	らん ②	お花の名前です。お祝いにももらったりします。
	り	りんどう ②	山でさく花です。
	る	るんるん ①	この子はとっても嬉しい気持ちです。どんな気分ですか。
	あ	あっち ①	この子は指を指して何と言っていますか。
	い	いっしょ ①	お母さんと女の子の帽子は、おそろいです。同じということを何と言いますか。
	う	うっかり ①	この人は、お皿を割ってしまいました。「〇〇〇〇していた」と言いました。
	け	けっこん ①	お母さんとお父さんが昔したものです。何ですか。
	こ	こっそり ①	この子はお母さんにこそこそと小さな声でお話しました。どんな風に話したか。
	さ	さっかあ ①	ボールをけるスポーツは何ですか。
	す	すっぱだか ⑦	この子は、お風呂に入るの服を全部ぬぎました。どうなりましたか。
	せ	せっけん ①	お風呂で使います。身体を洗うときに使うと、泡がたくさん出ます。
	そ	そっくり ①	この子たちは、双子です。顔がとても似ています。どう言いますか。
	た	たっぷり ①	ごはんがたくさんお茶碗についてあります。このことを何と言いますか。
	と	とっくり ①	この入れ物にお酒を入れてあたためます。この入れ物の名前は何かですか。
	に	にっこり ①	この人は笑っています。どのように笑っていますか。
	ね	ねっくれす ①	お母さんが持っているかもしれません。先生も今しています（実物を見せる）。
	の	のっば ①	このどんぐりは背が低いから「ちび」。こっちは背が高いから何ですか。
	は	はっぴ ①	お祭りのときに着るものです。これは、何ですか。
	ひ	ひっこし ①	新しいおうちに、荷物をトラックに載せて行きます。このことを何と言いますか。
	ふ	ふっく ①	鍵をかけた、輪ゴムをかけた、りするものは何ですか。
	へ	へっぴりごし ①	ローラースケートをはいて真っ直ぐ立てなくてこんな姿勢になっています。
	ほ	ほった ⑦	このりすと男の子のここは何ですか（指さし操作をつける）。
	ま	まっしろ ①	お洗濯をしたらきれいになりました。すごく白いことを何と言いますか。
	む	むっつり ①	この子は怒られてこんな顔をしています。どんな顔ですか。
拗音	や	やっこだこ ①	たこの仲間です。何と言うたこですか。
	ゆ	ゆっく ①	かたつむりが進んでいます。どんなスピードですか。
	ら	らっば ①	吹くと「プップクププー」と音が鳴ります。
	り	りっく ①	この橋の下には、川が流れています。この橋のことを何と言いますか。
	わ	わっかん ①	かわいい物を服にぬいつけます。これは何ですか。
	ぎ	ぎやく ①	カレーを食べるとき、スプーンを反対に持っています。このことを何と言う。
	き	きゃべつ ⑤	野菜です。トントントンと切って「焼きそば」や「お好み」に入れます。
	き	きょくげい ①	ピエロは大きな玉に乗って、小さな玉を投げています。これを何と言いますか。
	じ	じやがいも ⑤	カレーの中にごろごろ入っている野菜です。
	じゅ	しんじゅ ①	海の中の貝の中に入っています。これをつないでネックレスにします。
	じょ	まじょ ①	女の魔法使いです。
	ちゃ	ちゃわん ①	ごはんをよそう器です。
	に	こんにやく ⑤	プルプルした食べ物です。おでんに入っています。
	によ	によろによる ①	へびが動いています。どんなふう動いていますか。
拗長音	ひ	ひやくえん ①	お金です。「100」と書いてありますね。何ですか。
	び	びよんびよん ①	女の子はとっても喜んでいます。どんなふう跳んでいますか。
	み	みやく ⑦	心臓がドキドキします。すると手首のこもドキドキします。これは何ですか。
	り	とりゆふ ⑤	フランス料理につかうきのこです。
	しょう	しょうゆ ①	お豆腐にかけます。何ですか。
	にゅう	にゅうす ①	テレビの番組です。「明日のお天気は晴れです」と教えてくれます。
	びょう	びょうき ①	この人は熱が出ました。何になって、寝ていますか。
	びょう	はっぴょう ①	この人は、みんなの前でお話をしています。このことを何と言いますか。
	みゅう	みゅうじかる ①	歌いながら踊る劇のことを何と言いますか。
	みょう	みょうじ ①	先生は「大島」「ごとう」「たなか」とかいう名前を何と言いますか。

4. 言語調査の結果

4. 1 健常幼児の言語獲得及び音韻意識の獲得状況

健常幼児 65 名の各ことばの正答率（資料 1）については、各ことばの正答者数が 65 名に占める割合を「正答率」とする。「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗

音」「拗長音」別のことばの正答率を示した（図 2）。「ことば・カテゴリー」の欄におけるカテゴリーは、「①生活にかかわることば」「②植物」「③動物」「④昆虫・虫」「⑤食べ物」「⑥乗り物」「⑦身体」を指す。カテゴリー「①生活にかかわることば」「②植物」「③動物」「④昆虫・虫」

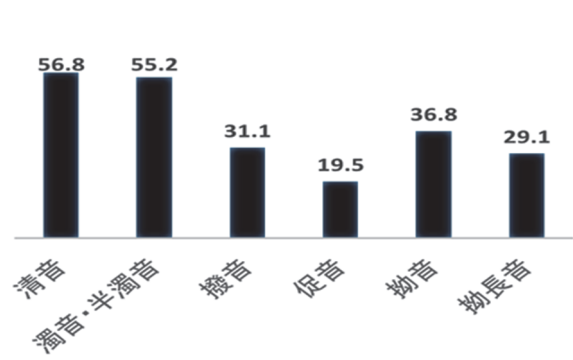


図2 音韻の種類別平均正答率 (%)

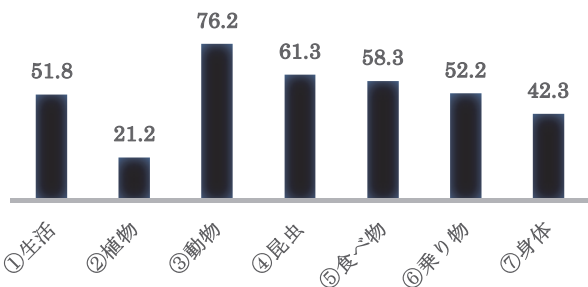


図3 カテゴリー別平均正答率 (%)

「⑤食べ物」「⑥乗り物」「⑦身体」別のことばの正答率を示した (図3)。

正答率が高かったのは、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「拗音」「拗長音」「促音」の順であった。「濁音・半濁音」が含まれることばの正答率については、「清音」とほぼ変わらなかった。

「③動物」「④昆虫・虫」「⑤食べ物」「⑥乗り物」「①生活にかかわることば」「⑦身体」「②植物」のカテゴリーの順で正答率が高かった。カテゴリー別のことばの数は、以下の表にまとめた (表3)。割合も表内に示した。「生き物」のカテゴリーとして「植物」「動物」「昆虫」「身体」をまとめると 28%となる。「生き物」以外のカテゴリーを「その他」として、「食べ物」「乗り物」をまとめると 25%となる。このような分類をすれば、カテゴリーのバランスは、概ね均整がとれる。

表3 各カテゴリーのことばの音韻数別語彙数及び割合 (%)

	2音韻	3	4	5以上	計	割合 (%)
①生活	5	29	37	18	89	47
②植物	1	1	4	2	8	5
③動物	6	11	7	3	27	14
④昆虫	1	1	3	5	9	5
⑤食べ物	0	9	20	7	36	20
⑥乗り物	0	1	3	5	9	5
⑦身体	1	2	2	1	6	4

どのようなカテゴリーのことばであっても、ことばの音韻数に着目すると、音韻数が増加するにつれて、ことばの平均正答率が低下していることがわかった (図4)。

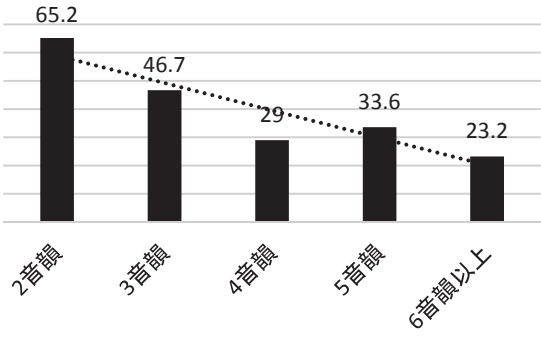


図4 音韻数別平均正答率 (%)

4. 2 障害幼児の言語獲得及び音韻識の獲得状況

C園の年長児クラスには、診断はおりていないものの発達障害の疑いがあり、「気になる子ども」として、B市のこども発達センターで療育を受けている幼児が2名 (F児・G児) 在籍している。この2名と、別のこども園に在籍し、同様にこども発達センターで療育を受けている幼児3名 (脳性麻痺1名：H児、自閉症2名：I児・J児) の計5名について調査を実施した。H児は境界知能である可能性が高い。

幼児5名 (F児・G児・H児・I児・J児) の184語のうち、正答できたことばの数を正答数とした。健常幼児65名の平均正答数と共に表示した (図5)。

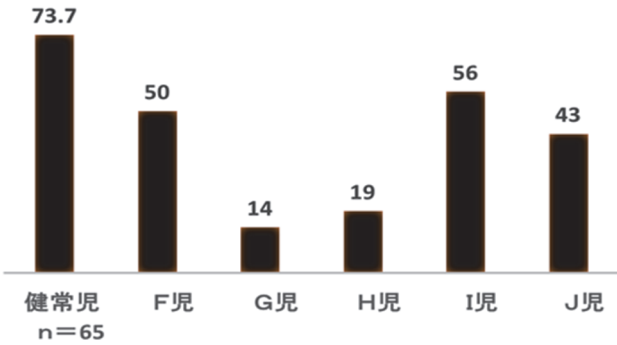


図5 健常児 (n=65) の平均正答数と障害幼児の個別の正答数

健常幼児の正答数と比較すると、障害幼児の正答数の数値は、5名中全員が低い値を示している。健常幼児と障害幼児5名の音韻の種類別の正答数を比較した (表4)。

表4 音韻の種類別ことばの正答数

音韻のカテゴリー	健常児正答数平均 (n=65)	F児	G児	H児	I児	J児
清音	26.7	24	12	8	23	19
濁音・半濁音	13.6	8	2	7	11	9
撥音	15.2	8	0	1	8	6
促音	4.6	0	0	0	5	4
拗音	7.6	6	0	2	6	4
拗長音	6	4	0	1	3	1
合計	73.7	50	14	19	56	43

F児、I児、J児は、濁音・半濁音までは健常幼児の平均を少し下回る程度の正答数だが、特殊音節の撥音、促音、拗音、拗長音は、I児の促音の値を除き全て下回る傾向が見られる。

G児とH児は、獲得できている語彙数が少なく、音韻の分解課題も困難であった。調査をしながら、音韻への意識が高まり、H児は「あくしゅ」「こんにやく」「りゅう」の音韻分解課題をクリアすることができた。G児は、語彙数も少なく、知っていることばで特殊音節が入らない2音韻程度なら分解することができたが、ほぼ音韻分解課題に困難な状況が見られた。健常幼児と障害幼児の184語の正答率については、資料1にまとめた。

4. 3 健常幼児と障害幼児の正答語彙について

調査に使用した184語において、健常幼児群の正答率と障害幼児5名の正答率を比較する為、Fisherの直接確率検定を行い、資料1の右欄に示した。有意な差が認められたことばは、以下の20語である(表5)。

$p<0.05$ 及び $p<0.01$ の確率で有意差が認められることばには、網掛けを施した。

表5 健常幼児と障害幼児の正答率(%)の比較

項 目	健常児 正答率 (%)	障害児 正答率 (%)	Fisherの直 接確立法に よる比率の 検定
え「えほん」	76.9	20.0	$p<0.05$
か「かぶとむし」	87.7	20.0	$p<0.01$
は「はちみつ」	81.5	20.0	$p<0.01$
へ「へそ」	52.3	0.0	$p<0.05$
ゆ「ゆきだるま」	89.2	40.0	$p<0.05$
ら「らいおん」	41.5	0.0	$p<0.10$
わ「わに」	96.9	60.0	$p<0.05$
が「がいこつ」	58.5	0.0	$p<0.05$
ぶ「ぶどう」	90.8	60.0	$p<0.10$
ぼ「ぼうし」	69.2	0.0	$p<0.01$
あ「あんぱん」	44.6	0.0	$p<0.10$
け「けんか」	80.0	20.0	$p<0.05$
さ「さんぽ」	47.7	0.0	$p<0.05$
て「てんぷら」	49.2	0.0	$p<0.05$
に「にんじん」	89.2	40.0	$p<0.05$
ね「ねんど」	60.0	0.0	$p<0.05$
ろ「めろんぱん」	67.7	20.0	$p<0.10$
きゃ「きゃべつ」	58.5	0.0	$p<0.05$
しょ「しょべるかあ」	40.0	0.0	$p<0.10$
ひゃ「ひやくえん」	61.5	20.0	$p<0.10$

正答率に有意な差が認められたことばは、20語である。これは、全体の約11%を占める。この20語のうち清音で構成されていることばは、「へそ」「はちみつ」の2語である。「へそ」は、全員が「おへそ」と答え、2音韻にするため「そ」をとって「おへ」とした。幼児は、「お」をつけたりつけなかったりするところばを、聞いたり話したりする中で正しく使えるようになっていく。障害幼児には、この区別がまだ難しい様子が見える。また、音韻数が5つである「ゆきだるま」は、正答できた幼児に何故知っているか理由を尋ねた。ほとんどの幼児が「保育園でつくったから」と答えている。印象深い活動であるにもかかわらず、障害幼児の場合はことばとして定着しなかった。

これら清音のことば以外は、特殊音節が含まれる。特殊音節の撥音が含まれることばには、「えほん」「らいお

ん」「あんぱん」「けんか」「さんぽ」「てんぷら」「にんじん」「ねんど」「めろんぱん」がある。「えほん」「けんか」「ねんど」は、園生活でよく使われることばだが、障害幼児の正答率は低い。

健常幼児と障害幼児の言語調査の正答率及びFisherの直接確率検定の結果をまとめた資料1をみると、健常幼児の184語のことばに対する反応から、今回の対象児の言語獲得過程の傾向がうかがえる。保育者も驚きを隠せなかった調査結果として、身近にある植物「すずき」や「なのはな」の正答率が低かった事実である。A県B市は、自然が豊かに残り、都会の環境とは違って、多くの木々や草花を園のすぐ近くで見ることができる。また、食べ物の名称が分からない幼児が多かった。家庭での食事や園での給食で普段から食べている「とんかつ」「てんぷら」「ぐらたん」の正答率が低かったことも、保育者には驚きの結果となった。

4. 4 調査に用いたことばについて

調査は、小学校低学年に児童にも対応することができるようのことばを選択したため、幼児には難解なものが含まれている。特に、「むんむん」「るんるん」などの擬態語(オノマトペ)や「こっそり」「すんなり」「うっかり」などの副詞は、正答率が低かった。「きょくげい」「はっぴょう」などは、幼児の生活や園での活動では耳慣れないことばである。

調査に用いた184語のうち、119語(65%)は小学校国語科の教科書に用いる語彙であり、65語(35%)はこの語彙には含まれない。正答率が10%以下ときわめて低かったことば43語をカテゴリー別に表6にまとめた。教科書で用いられないことばには下線を引いた。これらが占める割合は60.5%だった。逆に教科書の語彙表には記載されていないが、今回正答率が50%以上を示したことばは「つめきり」「へそ」「めろん」「ゆきだるま」「がいこつ」「ぷりん」「ぼてと」「くれよん」「めろんぱん」「こんにやく」である。園での生活場面に登場する道具や季節ならでのもの、アニメに登場するもの、給食で食べるものは、ことばとして認識されやすいことがわかる。

調査した園ではないが、「すっぱだか」のような幼児にとって難解なことばを知っている幼児は、「お父さんがお風呂にはいるときに、いつもいうから知っている」と答えた。家庭生活の中にあるエピソードが、ことばを増やしていることがうかがえる。難解語句は、言語指導プログラムでは、語頭の音韻が特定されること、選択肢から音韻を☆に当てはめるとことばを構成した時点で音韻の正誤が表示されることから、音韻を選び試行を繰り返す作業により正答する可能性がある。知らないことばでも正しく音韻を並べて作る作業が、遊びの要素になる。

表6 正答率10%以下のことば

	ことば	数
①	ぬの・ <u>そんごう</u> ・ <u>ぬんちやく</u> ・ <u>むんむん</u> ・ <u>るんるん</u> ・ <u>いっしょ</u> ・ <u>こっそり</u> ・ <u>そっくり</u> ・ <u>にっこり</u> ・ <u>すんなり</u> ・ <u>あっち</u> ・ <u>のっぽ</u> ・ <u>へっぴりごし</u> ・ <u>まっしろ</u> ・ <u>うっかり</u> ・ <u>むつつり</u> ・ <u>やっこだこ</u> ・ <u>とっくり</u> ・ <u>りっきょう</u> ・ <u>わっぺん</u> ・ <u>ぎやく</u> ・ <u>ふつく</u> ・ <u>きょくげい</u> ・ <u>しんじゅ</u> ・ <u>はっぴょう</u> ・ <u>みゅ</u> ・ <u>うじかる</u> ・ <u>みょうじ</u> ・ <u>やんわり</u>	28
②	なのはな・ <u>らん</u> ・ <u>なんてん</u> ・ <u>りんどう</u>	4
③	<u>りやま</u> ・ <u>びゅうま</u>	2
④	るりたては	1
⑤	<u>もなか</u> ・ <u>きんかん</u> ・ <u>ぜんざい</u> ・ <u>くんたま</u> ・ <u>とりゆふ</u>	5
⑥	<u>すっぱだか</u> ・ <u>みやく</u>	2
⑦	<u>りょかくき</u>	1
	計	43

言語指導プログラムは、「音韻シート」の開発により、語頭の音韻の性質が視覚的に理解できるように工夫した。特殊音節になる可能性がある音韻シートは、小さく書く「や」「ゆ」「よ」が合体できるようにシートの右下が欠けている。語頭の音韻（清音・濁音・半濁音）がどのように特殊音節に変化するか、結び付く音韻のルールを視覚化し、音声と結び付けて理解を図る。難解語句であっても、語頭の音韻をヒントとし、障害幼児でも選択肢の音韻の組み合わせを試行錯誤する意欲を喚起するようにした（大島，2014）。

5. 考察

A 県 B 市の C 園・D 園の健常幼児における語彙獲得及び音韻意識獲得の言語調査結果から、健常の年長児（5歳児）の語彙獲得及び音韻意識の獲得状況には以下のような特徴が見受けられた。

- ① 正答率が高かったのは、「清音」「濁音・半濁音」「拗音」「撥音」「拗長音」「促音」の順であった。
- ② 各カテゴリーのことばは、音韻数が多くなるに従って正答率は低下した。
- ③ 言語指導プログラムで取り扱うことばとして、幼児向けには難しく正答率 0% のことばは、生活の中で馴染の少ない「生活にかかわることば」の「とっくり」「のっぽ」「へっぴりごし」「むんむん」「むつつり」「やっこだこ」「りっきょう」「みゅうじかる」「植物」の「りんどう」「動物」の「りやま」「食べ物」の「くんたま」「身体」の「みやく」「すっぱだか」だった。

「動物」の正答率が高いのは、絵本や紙芝居に動物が登場するため、見なれていたり聞きなれていたりすることばであること、またお話の登場人物として、エピソードとともに記憶に残りやすいことが推察される。「昆虫」の正答率が高いのは、園庭や近くの公園などで、実際に

虫取りなどをして幼児に馴染のある昆虫を取り扱ったためと考えることができる。しかし、どのカテゴリーのことばも概ね音韻数が増加すると、正答率が低下する傾向を確認した。カテゴリー別のことばの数には偏りがあるため、今回の調査における正答率はカテゴリーからの観点では比較や分析は難しい。しかし音韻の種類や数によって、正答率が変化することに注目する必要がある。

殊音節が含まれることばの音韻分解課題の難易度は高くなる。音声のない促音「っ」は文字表記を何度も経験する中で、音韻意識が習得されると思われる。撥音「ん」[N]は、「あんぱまん」[aNpaNmaN]のことばが[aN]、[paN]、[maN]の2音節ずつのまとまり（3拍）で構成されるが、[a][N][pa][N][ma][N]と6モーラに分解できる。この音韻分解で混乱したことが要因となり、「拗音」を上回る正答率の低さにつながったと考える。

言語指導プログラムで取り扱うことばは、小学生児童への活用を視野に入れて、日本語を構成する音韻ごとにことばを集めたが、「くんたま」「るりたては」「へっぴりごし」「みやく」「りやま」「みゅうじかる」などは、予想通り正答率は 0% だった。また名詞ではなく、様子を表わすことばである「むつつり」「むんむん」や「うっかり」などの副詞についても、正答率が低かった。さらに「はし」「ひこうき」などのことばは獲得できているが、その言い換えのことばである「りっきょう」「りょかくき」などは「わからない」と答える幼児が多かった。幼児には明らかに難しいと思われることばのうち、正答率 10% 以下のことば（表 6）は、今後、幼児向けの言語調査用絵カードとしての取り扱いは、検討する必要がある。

さらに障害幼児 5 名の語彙獲得及び音韻獲得の言語調査結果によって、以下のような特徴が見受けられた。

- ① 健常幼児と気になる幼児の正答数を比較し、音韻処理能力は健常幼児よりも低いことが示唆された。
- ② 健常幼児と障害幼児の正答率の比較から、「えほん」「かぶとむし」「はちみつ」「へそ」「ゆきだるま」「らい おん」「わに」「がいこつ」「ぶどう」「ぼうし」「あんぱん」「けんか」「さんぽ」「てんぷら」「にんじん」「ねんど」「めろんぱん」「きゃべつ」「しょべるかあ」「ひゃくえん」の 20 語に有意差が認められた。

障害幼児は 5 名であるが、健常幼児と比較すると、全員が獲得語彙及び音韻意識の状況には遅れが見られた。障害幼児 5 名のうち、G 児と H 児（脳性麻痺）の 2 名は、軽度ではあるが知的障害の疑いがある。この 2 名については、音韻分解課題はもちろん語彙の獲得状況が極めて低かった。清音で 2 音韻の「へそ」が不正解となった理由は、「おへそ」から「お」を取ることが全員できなかったことにある。音韻意識が獲得される以前、幼児はことばをかたまりで認識している。「お」を取ることができる

ことばを意識できるのは、音韻への認識が備わった時点で可能となることも要因の一つと考えられる。また自分の身体についての興味関心が、健常幼児よりも低い可能性も考えられる。へその存在は、生活の中で強く意識されるものではない。日々身体を動かすためにコントロールする手足とは異なり、明確な役割をもたない。しかし、身体を中心にあり、視覚的には目立つ存在でもある。語彙として定着しない理由は、障害幼児の認知の弱さとの関連からくると考えられる。障害幼児が知らない事物について、あえて認知できる場面を設定していくことが、言語獲得を促進することになる。

限局性学習症（発達性読み書き障害）は、ディスレクシアともいわれる。学習障害は、ほとんど就学後にその困難性が認知され、診断に至る。しかし、幼児期にも何らかの兆候があると考えられ、早期に適切な支援を行うためにもその兆候を見出すことが期待されている。

障害幼児5名のうち、文字がほとんど読めなかったのはG児のみであった。しかし、今回の調査で、健常幼児群の中には、語彙としてことばを獲得できているにもかかわらず、文字がほとんど読めないために音韻分解課題がクリアできない幼児の存在が明らかとなった。園の保育者には「気になる子ども」と認識されていないが、語彙獲得が極めて遅れている幼児も存在した。これらの幼児が、就学後教科学習において、困難を感じることなく十分な学習を行えるのか、学習障害の可能性を視野に入れて見極める必要がある。

6. 今後の課題

今回、C園・D園の健常幼児の調査結果では、正答数の平均値に、C園（60.5）、D園1組（72.1）、D園2組（88.6）と差異が認められた。この調査結果が有意な差であるかについても検討したい。また、保護者の意識の違いが、言語力に影響しているかを見極めるため、保護者向けの質問紙調査を実施する。今後、この調査結果を分析し考察を行うことで、家庭における環境がどのように言語力に影響するかを分析したい。

また、語彙力は高いが、音韻分解課題が困難であった幼児の小学校での学習状況を調査し、幼児期において音韻意識の獲得が十分ではなかった児童に学習障害が認められるかについて確認する。その中に、学習障害の中でも「限局性学習症（発達性読み書き障害）」の児童が確認できれば、幼児期の言語調査の結果と照らしあわせ、予兆と言えるような実態を検討する。

また、早期に音韻意識が十分に獲得されていない幼児を発見するだけでなく、早期に支援ができる方法を確立する必要がある。「早期に言語学習困難を発見することは不可能ではない」という小林（2016）のことばからも、適切な早期発見と早期支援が期待される。

言語力は、就学後の基礎学力を支えるものである。学力の差は、読解力の差といっても過言ではない。今回の言語調査で低成績であった幼児には、幼児期である早期に音韻意識の獲得を目指した言語指導を実施するべきである。E子ども発達センターに通うH児（脳性麻痺・境界知能）、I児（非定型自閉症）、J児（自閉症スペクトラム）の3名については、著者が開発した言語指導プログラムを用いて療育を実施した（H28.1月～8月）。言語指導プログラムによって、音韻意識の獲得が促進されるかどうかについて事例研究をとおして検証したい。障害によって、音韻意識の獲得過程にはそれぞれ特徴があることが予測される。その特徴を見出すことも、今後の支援方法の確立に向けて大きな意義をもつ。ゲームの要素を取り入れた言語指導プログラムの有効性を様々な角度から分析し考察したい。

今回の調査では、言語指導プログラムで取り扱う全てのことば（184語）を絵カードにし、調査を行った。絵だけではわかり難いと予想される「ことば」には、説明を加えた。絵カードの絵や説明文の分かりやすさも今後検討していく必要がある。また、調査には、一人15分ずつ6回程度の回数を要し、個別に90分以上の時間を確保しなければならない点が課題となった。絵カードを厳選し、短時間で幼児の実態が調査できるよう改善することで、音韻意識が十分に獲得できていない幼児の早期発見・早期支援が実現できると考える。

注釈

- 1) 小学校国語 語彙に着目した授業をつくる語彙表編（2011）：甲斐睦朗監修，松川利広編，光村図書

引用・参考文献

- 我妻敏博（2011）改訂版聴覚障害児の言語指導～実践のための基礎知識～，田研出版株式会社，25
- 天野清（1970）語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習，教育心理学研究，18(2)，76-89
- 天野清（1986）子どものかな文字の習得過程，秋山書店，99-188
- 天野清（1988）音韻分析と子どもの Literacy の習得，教育心理学年報，27，142-164
- 原恵子（2003）子どもの音韻障害と音韻意識，コミュニケーション障害学，20，98-102
- 日高希美・橋本創一・大伴潔（2007）健常幼児と発達障害児の音韻意識の発達過程と文字習得との関連性について，東京学芸大学紀要・総合教育科学系，58，405-413
- 小林マヤ（2016）学習に困難をもつ子どもにとっての英語学習，こころの科学 187，日本評論社，53-57
- 文部科学省（2013）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」文部科学省初等中等教育

局特別支援教育課

文部科学省(2015)資料1教育課程企画特別部会論点整理(案)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_1.pdf

大石敬子(1997)読み障害児3例における読みの障害機構の検討—話し言葉の問題を通して—LD(学習障害)—研究と実践—, 6(1), 31-44

大石敬子・斉藤佐和子(1999)言語発達障害における音韻の問題—読み書き障害の場合—音声言語医学, 40, 378-387

大島光代(2004):「聴覚障害児の音韻意識・語彙の獲得を目指す言語指導プログラム」(日本学術振興会による科学研究費を活用した研究)

大島光代(2008):「聴覚障害児の構文力の向上を目指す言語指導プログラム」(日本学術振興会による科学研究費を活用した研究)

大島光代(2014)音韻意識の獲得をめざした発達障害児の言語・コミュニケーションプログラム試作に関する一考察, 障害者教育・福祉学研究, 10, 75-84.

大島光代(2015)自閉症スペクトラム児の読み・書きの研究動向に関する一考察, 障害者教育・福祉学研究, 11, 45-56.

総務局省統計局(2016)HP人口推計(平成28年4月確定値, 平成28年9月概算値)(2016年9月20日公表)
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.htm>

柘植雅義(2016)日本における学習障害の頻度—文部科学省の実態調査から—, こころの科学 187, 日本評論社, 21-26

長南浩人・斉藤佐和(2007)人工内耳を装用した聴覚障害児の音韻意識の発達, 特殊教育学研究, 44(5), 283-290

[連絡先 大島 光代 E-mail: mituyo@nuas.ac.jp]

資料1 健常幼児と障害幼児の正答率（％）

ことば 幼児	健常幼児	気になる幼児						Fisher の正確 な検定 による 検定
	正答率 (%)	F	G	H	H	I	正答率 (%)	
あ「あひる」	75.4	×	○	×	×	○	40.0	
い「いぬ」	84.6	○	○	○	○	○	100.0	
う「うま」	84.6	○	○	×	○	○	80.0	
え「えほん」	76.9	×	×	×	○	×	20.0	p<0.05
お「おやつ」	36.9	○	×	×	×	×	20.0	
か「かぶとむし」	87.7	○	×	×	×	×	20.0	p<0.01
き「きつね」	95.4	○	○	×	○	○	80.0	
く「くわがた」	76.9	○	×	×	×	○	40.0	
け「けむし」	76.9	○	×	×	○	×	40.0	
こ「こま」	89.2	○	○	○	×	○	80.0	
さ「さつまいも」	50.8	○	×	×	○	○	60.0	
し「しんかんせん」	52.3	○	×	×	○	○	60.0	
す「すすき」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
せ「せみ」	95.4	○	○	○	○	○	100.0	
そ「そらまめ」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
た「たからもの」	58.5	○	×	×	○	×	40.0	
ち「ちりと」	36.9	×	×	×	○	×	20.0	
つ「つめきり」	53.8	○	×	○	×	×	40.0	
て「てあし」	32.3	×	×	×	×	×	0.0	
と「とまと」	96.9	○	○	×	○	○	80.0	
な「なのはな」	4.6	×	×	×	×	×	0.0	
に「にわとり」	83.1	○	×	○	○	○	80.0	
ぬ「ぬの」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
ね「ねこ」	95.4	○	○	○	○	○	100.0	
の「のりまき」	16.9	×	×	×	○	×	20.0	
は「はちみつ」	81.5	○	×	×	×	×	20.0	p<0.01
ひ「ひなまつり」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
ふ「ふみきり」	30.8	×	×	×	○	○	40.0	
へ「へそ」	52.3	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
ほ「ほうれんそう」	21.5	×	×	×	×	×	0.0	
ま「まくら」	92.3	○	×	○	○	○	80.0	
み「みかん」	96.9	○	○	×	○	○	80.0	
む「むさび」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
め「めろん」	81.5	○	○	×	○	×	60.0	
も「もなか」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
や「やどかり」	29.2	×	×	×	×	×	0.0	
ゆ「ゆきだるま」	89.2	×	×	×	○	○	40.0	p<0.05
よ「よる」	44.6	○	×	×	○	○	60.0	
ら「らいおん」	41.5	×	×	×	×	×	0.0	p<0.10
り「りす」	93.8	○	○	×	○	○	80.0	
る「るりたては」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
れ「れもん」	89.2	○	○	×	○	○	80.0	
ろ「ろぼと」	26.2	×	×	×	×	×	0.0	
わ「わに」	96.9	○	×	○	○	×	60.0	p<0.05
が「がいこつ」	58.5	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
ぎ「ぎんめだる」	35.4	×	×	×	×	×	0.0	
ぐ「ぐらたん」	26.2	×	×	×	×	×	0.0	
げ「げた」	26.2	×	×	×	×	×	0.0	

ご「ごりら」	90.8	○	×	○	○	○	80.0	
ざ「ざるそば」	35.4	×	×	×	×	×	0.0	
じ「じめん」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
ず「ずぼん」	93.8	○	×	○	○	×	60.0	
ぜ「ざんざい」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
ぞ「ぞう」	80.0	×	○	×	○	○	60.0	
だ「だんごかあ」	12.3	×	×	×	×	×	0.0	
で「でんわ」	66.2	○	○	○	○	○	100.0	
ど「どんぐり」	84.6	×	×	○	○	○	60.0	
ば「ばなな」	96.9	○	×	○	○	○	80.0	
び「びすけと」	18.5	×	×	×	×	×	0.0	
ぶ「ぶどう」	90.8	○	×	×	○	○	60.0	p<0.10
べ「べっど」	24.6	×	×	×	×	×	0.0	
ぼ「ぼうし」	69.2	×	×	×	×	×	0.0	p<0.01
ば「ばとかあ」	46.2	○	×	×	×	×	20.0	
び「びえろ」	23.1	×	×	×	○	×	20.0	
ぶ「ぶりん」	86.2	○	×	○	○	○	80.0	
べ「べんぎん」	81.5	○	×	×	○	○	60.0	
ぼ「ぼてと」	86.2	×	×	○	○	○	60.0	
あ「あんぱん」	44.6	×	×	×	×	×	0.0	p<0.10
い「いんこ」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
う「うんち」	47.7	×	×	×	○	×	20.0	
え「えんそく」	46.2	×	×	×	×	○	20.0	
お「おんなのこ」	32.3	×	×	×	×	×	0.0	
か「かんづめ」	38.5	○	×	×	×	×	20.0	
き「きんかん」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
く「くんとま」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
け「けんか」	80.0	○	×	×	×	×	20.0	p<0.05
こ「こんにちは」	43.1	×	×	×	×	○	20.0	
さ「さんぽ」	47.7	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
し「しんぶんし」	56.9	○	×	×	○	○	60.0	
す「すんなり」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
せ「せんすいかん」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
そ「そんごくう」	7.7	×	×	×	×	×	0.0	
た「たんけん」	33.8	×	×	×	×	×	0.0	
ち「ちんぱんじい」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
つ「つつん」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
て「てんぶら」	49.2	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
と「とんかつ」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
な「なんてん」	4.6	×	×	×	×	×	0.0	
に「にんじん」	89.2	×	×	×	○	○	40.0	p<0.05
ぬ「ぬんちゃく」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
ね「ねんど」	60.0	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
の「のんびり」	15.4	×	×	×	×	×	0.0	
は「はんかち」	76.9	○	×	×	○	×	40.0	
ひ「ひんと」	12.3	×	×	×	×	×	0.0	
ふ「ふんか」	21.5	×	×	×	×	×	0.0	
へ「へんじ」	16.9	×	×	×	○	×	20.0	
べ「べんとう」	40.0	×	×	×	○	×	20.0	
ほ「ほん」	63.1	○	×	×	×	○	40.0	

ま「まんが」	29.2	×	×	×	×	×	0.0	
み「みんみんぜみ」	20.0	×	×	×	×	×	0.0	
む「むんむん」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
め「おめん」	40.0	×	×	○	×	×	20.0	
も「ももんが」	38.5	×	×	×	×	×	0.0	
や「やんわり」	1.5	×	×	×	×	○	20.0	
よ「くれよん」	75.4	○	×	×	○	×	40.0	
ら「らん」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
り「りんどう」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
る「るんるん」	9.2	×	×	×	×	×	0.0	
れ「れんこん」	70.8	○	×	×	○	×	40.0	
ろ「めろんぼん」	67.7	○	×	×	×	×	20.0	p<0.10
わ「おわん」	16.9	×	×	×	×	×	0.0	
あ「あっち」	7.7	×	×	×	×	○	20.0	
い「いっしょ」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
う「うっかり」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
お「おっとせい」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	
か「かつば」	29.2	×	×	×	×	○	20.0	
く「くっきい」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
け「けっこん」	20.0	×	×	×	×	×	0.0	
こ「こっそり」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
さ「さっかあ」	27.7	×	×	×	×	×	0.0	
し「しっぱ」	29.2	×	×	×	○	×	20.0	
す「すっぱだか」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
せ「せっけん」	27.7	×	×	×	×	○	20.0	
そ「そっくり」	7.7	×	×	×	×	×	0.0	
た「たつぶり」	13.8	×	×	×	×	×	0.0	
て「てっぼう」	26.2	×	×	×	○	×	20.0	
と「とっくり」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
な「なっとう」	26.2	×	×	×	○	○	40.0	
に「にっこり」	6.2	×	×	×	×	×	0.0	
ね「ねっくれず」	18.5	×	×	×	×	×	0.0	
の「のっぱ」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
は「はっぱ」	18.5	×	×	×	×	×	0.0	
ひ「ひっこし」	16.9	×	×	×	×	×	0.0	
ふ「ふっく」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
へ「へっぴりごし」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
ほ「ほっぺた」	15.4	×	×	×	×	×	0.0	
ま「まっしろ」	9.2	×	×	×	×	×	0.0	
む「むつつり」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
や「やっこだこ」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
ゆ「ゆっくり」	15.4	×	×	×	×	×	0.0	
よ「よっと」	16.9	×	×	×	○	○	40.0	
ら「らっぱ」	27.7	×	×	×	○	×	20.0	
り「りっきょう」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
れ「れっしゃ」	7.7	×	×	×	×	×	0.0	
わ「わっぺん」	6.2	×	×	×	×	×	0.0	
ぎや「ぎやく」	6.2	×	×	×	×	×	0.0	
ぎよ「きんぎよ」	69.2	○	×	×	○	○	60.0	
きや「きやべつ」	58.5	×	×	×	×	×	0.0	p<0.05
きよ「きよけい」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
しゃ「しゃつ」	24.6	×	×	×	×	×	0.0	

しゅ「あくしゅ」	60.0	×	×	○	○	×	40.0	
しょ「しょべるかあ」	40.0	×	×	×	×	×	0.0	p<0.10
じゃ「じゃがいも」	58.5	○	×	×	○	○	60.0	
じゅ「しんじゅ」	4.6	×	×	×	×	×	0.0	
じょ「まじょ」	58.5	○	×	×	×	×	20.0	
ちゃ「ちゃわん」	49.2	×	×	×	×	○	20.0	
ちょ「ちょこ」	78.5	○	×	×	○	○	60.0	
にや「こんやく」	67.7	○	×	○	○	×	60.0	
によ「によろによろ」	29.2	×	×	×	○	×	20.0	
ひや「ひやくえん」	61.5	○	×	×	×	×	20.0	p<0.10
びよ「びよんびよん」	20.0	×	×	×	×	×	0.0	
みや「みやく」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
りや「りやま」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
りゅ「とりゅふ」	3.1	×	×	×	×	×	0.0	
りょ「りょかくき」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
きゅう「ききゅう」	36.9	×	×	×	×	×	0.0	
きょう「きょうりゅう」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
ぎゅう「ぎゅうにゅう」	47.7	○	×	×	×	×	20.0	
ぎょう「ぎょうざ」	38.5	×	×	×	×	×	0.0	
しゅう「しゅうまい」	32.3	×	×	×	×	×	0.0	
しょう「しょうゆ」	43.1	○	×	×	○	×	40.0	
じゅう「じゅうず」	52.3	○	×	×	○	×	40.0	
じょう「じょうろ」	46.2	×	×	×	○	×	20.0	
ちゅう「ちゅうりつぷ」	13.8	×	×	×	×	×	0.0	
ちょう「ちょうちょ」	60.0	○	×	×	×	○	40.0	
にゅう「にゅうず」	23.1	×	×	×	×	×	0.0	
ひょう「ひょう」	27.7	×	×	×	×	×	0.0	
びょう「びょうき」	20.0	×	×	×	×	×	0.0	
びゅう「びゅうま」	1.5	×	×	×	×	×	0.0	
びょう「はっぴょう」	9.2	×	×	×	×	×	0.0	
みゅう「みゅうじかる」	0.0	×	×	×	×	×	0.0	
みょう「みょうじ」	7.7	×	×	×	×	×	0.0	
りゅう「りゅう」	56.9	×	×	○	×	×	20.0	
りょう「りょうて」	10.8	×	×	×	×	×	0.0	

Features of the Acquisition of Vocabulary and Phonological Awareness in Healthy and Unhealthy Infants

Mitsuyo Oosima

*Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Graduate School of Education,
Aichi University of Education & Shizuoka University*

Abstract

This study aims to examine the differences in the acquisition of vocabulary and phonological awareness between healthy and unhealthy infants. Five-year-old healthy and unhealthy infants from A Prefecture, B city, were included in this study and their acquisition of vocabulary and phonological awareness was investigated. Vocabulary was broken down into the following categories: (1) life, (2) plants, (3) animal, (4) insect, (5) food, (6) vehicle, and (7) body. For special syllables, it was found that the percentage of correct answers was low. For words, a significant difference was observed in the percentage of correct answers between the two groups, that is, a difference of 20 words. In order to expand the possibility of early guidance and support for unhealthy infants, it is important to verify the actual situation by checking for signs of learning disabilities in an infant, such as difficulty in paying attention, localized learning disorder, developmental reading and writing disorder, or a specific learning disorder.

Keyword

Acquisition of vocabulary, Acquisition of phonological awareness, Language survey, Healthy infants , Unhealthy infants